

「創造性が社会と出会う美術教育」による 教員の学びに関する基礎研究

—「市井no姿勢ni学ぶプロジェクト」の課題整理—

松浦 藍 ・ 妹尾 佑介* ・ 清田 哲男

本論文は、美術科の教員が新しい価値の生成を目指した授業研究やカリキュラム構築を行うための基礎研究にあたるものであり、その目的は、教員も新しい価値を求めて学び続ける力を培うために「市井no姿勢ni学ぶ」プロジェクト（以下、市井プロジェクトと表記）の有用性を確認することである。市井プロジェクトとは、①教員が日常生活で出会った他者と会い、②他者が学んできたことについてインタビューし、③②を生かした授業を実施し、④②で話を聞かせていただいた他者と③の授業検討を行うというものである。本論文では、①と②の成果と課題をまとめた。成果は、②インタビューを通して教員自身の学びが変容する姿を確認し、インタビュー相手であるK氏自身にも変容が見られたことである。その一方で、課題は、K氏とインタビューの質問者との関係性による検討が行えていない点である。

Keywords：美術教育，創造性，研修

1 はじめに

(1) 本研究の概要と目的

本論文は、美術科の教員が、新しい価値の生成を目指した授業研究やカリキュラム構築を行うための基礎研究にあたるものである。教育基本法によれば、教員は「自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」¹とされている。つまり、教員が教育活動をするにあたり、自分自身の教育理念を持ち、子どもたちの姿に寄り添うため自ら学び続ける姿勢が求められていると捉えることができよう。

特に、2000年から総合的な学習の時間が始まり、課題解決・解決型学習の実践が行われるようになって久しい。そのことを踏まえると、教員は子どもたちが生きる未来の社会を多様な視点から想像する力や、多様な人々で構成されていることを想定した社

会で願いや夢を持つことが求められる。児童生徒だけでなく、教員を含むすべての人が豊かで幸福な生き方を追究することは、必要不可欠であると考ええる。

そして、教員が学ぶ機会として、各学校や教育委員会によって行われる研修への参加や、大学院への進学、セミナーへの参加等が考えられる。文部科学省も、教員研修について「都道府県・指定都市・中核市教育委員会等は、研修の計画的な実施」の必要性や、「初任者研修等の法定研修をはじめとする各種研修の体系的な整備」を図ることを示している²ことから、教員には学び続けられる機会が保証されていると言えよう。

しかし、「学び」とは、必ずしも他者が用意した特別な機会で行われる場合ばかりではない。つまり、教員にとっても、研修や講義という特定の場だけでなく、日常生活そのものが学びの場になり得ると言えよう。これは、佐伯胖の「人は常に他者とともに

岡山大学学術研究院教育学域 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*岡山県立玉島高等学校 713-8121 倉敷市玉島阿賀崎3丁目1-1

Basic Research on the Appreciation of Sculpture Works by Children in Schools for the Blind
-Through the arrangement of issues based on the literature survey-
Ai MATSUURA, Yusuke SENO, and Tetsuo KIYOTA

Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Okayama Prefectural Tamashima High School, 3-1-1 Tamashima Agasaki, Kurashiki, 713-8121

学ぶ存在」³という主張に基づいて示された「学びのドーナツ」を根拠としている。また、佐伯の「学びのドーナツ」は、アンリ・ワロン (Henri Wallon) が示した自我発達論であるため、「自己自身の感受性の内部に他者性を認識する」ことで、より学びを拡大していくことと捉えることができる⁴。

そして、子どもの創造的な学びにとって、教員の在り方が重要であることは、井庭崇も「創造を生徒・学生が経験できるように支援するこれからの教師は、ますます創造的でなければならない」⁵と述べる。井庭の述べる「創造」とは「発見の生成・連鎖」⁶を意味している。なお、井庭の主張は、レフ・セミョーノヴィチ・ヴィゴツキー (Lev Simkhovich Vygodskiy) の「未来の教育者は実生活への活発な参加者となる (柴田 義松・宮坂【ゆう】子訳)」⁷という主張や、ジョン・デューイの「協働社会の一員として (筆者訳)」⁸「毎日顔を合わせて協働する (筆者訳)」という主張に基づいている⁸。

井庭の主張を踏まえると、教員自身も子どもと同様、日常生活で学び続ける必要があると言えよう。そのためには、研修等も含め、教員から実生活で出会う他者からの学びを、子どもへの教育活動に還元する力をつけることは急務である。

2 本論文の目的と概要

本論の目的は、教員が日常生活の中で接する他者から題材研究やカリキュラム構築を行うために必要な「学び」を自ら行うために有用な取り組みを開発することである。

先行研究において、題材研究やカリキュラム構築をするための理論や指導方法はなされている。教員自身の他者との関わりにおいて言えば、同僚や子どもとの関係性から、教育的効果を検討する研究は散見される。しかし、教員が学校教育の文脈に関わらず、日常生活で接する他者から、直接学ぶことについて言及する研究は、筆者らが確認する限り見られない。

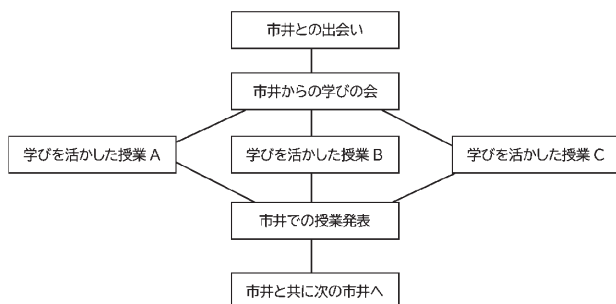


図1 市井プロジェクトの流れ

そこで、本論の目的を達成するために、筆者らの研究チームにおいて、「市井no姿勢ni学ぶ」プロジェクト（以下、市井プロジェクトと表記）を行うこととした。市井プロジェクトの流れは、①教員が日常生活で出会った他者と会い、②他者が学んできたことについての話を聞くことを通して、③②を生かした授業を実施し、④②で話を聞かせていただいた他者と③の授業検討を行うというものである（図1）。

市井プロジェクトの詳細は、第3章で後述する。

3 本論文に至るまでの経緯

教員が学ぶことに焦点化した市井プロジェクト以外にも、筆者らは図画工作科や美術科の教員を対象とした取り組みを行っている。以下では、本論に至るまでの経緯として、筆者らのこれまでの取り組みの概要と課題について詳述する。

(1) これまでの研究の概要

筆者らは、創造的な活動を通して、より良い社会をイメージして願いや希望を持つことができる美術教育の実現を目指した授業実践やカリキュラムの構築を行ってきた。研究チームは、現在7名で活動しており、これまでの研究は三段階に分けられる。

①第1次研究 「やさしさの造形教育」

2009年より、第1次研究として、小、中、高校、大学の教員と共に、ユニバーサルデザインの考え方を基に美術教育の題材によるカリキュラム研究を始めた⁹。第1次研究の段階では、教員同士での題材を検討し、カリキュラム構築のための研修会を実施していた。第1次研究では、ユニバーサルデザインの概念を根底としていたため、他者との関係性に着目する学習活動が多かった。一方で、第1次研究では美術の授業の学習目的が「共感性の感受や、福祉の考え方となり、造形要素を念頭とした表現活動や鑑賞活動へと向かいにくくなった」という結果も見られた¹⁰。換言すれば、題材を考える際の視点が身近な他者や、障害者や社会的弱者等、特定の立場と深く関わっていたと言えよう。他者と共に学ぶという点においては、佐伯の述べた学びと合致する。しかし、社会全体からの視点が不足していた点が課題として挙げられた。

②第2次研究 「創造性が社会と出会う美術教育」

第1次研究での課題を踏まえ、2017年からは、第2次研究を始めた。第2次研究では「創造性が社会と出会う美術教育 Art Education Nurturing Creativity through Encounters with Society (ANCS) カリキュラムモデル（以下、ANCSモデルと表記）」と言う、

創造性を軸とした美術教育のカリキュラム構築をめざした実践的研究活動を全国で展開した¹¹。第2次研究での基底概念は、先述した佐伯がワロンの考え方を図式化した「学びのドーナツ」(図2)¹²である。「学びのドーナツ」とは、佐伯がワロンの「第二の自我L' Alter Ego」として複数の自我を内包させ、「自己自身の感受性の内部に他者性を認識する」¹³ことで自我を拡大させるという考え方である。そして、「学びのドーナツ」を雛形にANCSモデルでの学習過程の図を構築した(図3)。なお、図3で示したSTEP 1からSTEP 3にかけての流れを表1にまとめた¹⁴。

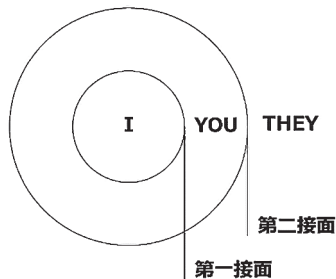


図2 学びのドーナツ論(本文を基に清田が作成)

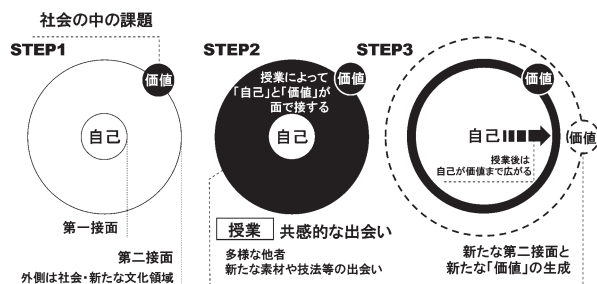


図3 ANCSモデルにおける学習の過程(2020, 清田)

各学校園のANCSモデルのカリキュラムにおいて、創造性の育成に対する美術教育の有効性について、アンケートによる量的研究の手法のみで検討してきた。そのため、一人ひとりの表現活動における創造性の表出を詳細に検討できていない状況にあった。そして、ANCSモデルに基づく題材やカリキュラムを考えるにあたり、教員自身にも図3で示した学びを日常生活でも実現できる力が必要であると考えた。児童生徒が学習活動において共感を伴って他者と出会い、自己を拡大していき、新たな価値を生成している姿を見とるためには、教員にも同様の経験が必要となることは想像にたやすい。

しかし、ANCSモデルに基づく学びの経験の有無は、教員一人ひとり異なる。つまり、第2次研究の段階では、ANCSモデルを構築し、児童生徒が新しい価値に向かう学びを拡充していたとしても正しく見とれていない可能性がある点が課題として挙げられる。

表1 ANCSモデルにおける学習の各過程の概要

各過程	概要
STEP 1	「現在理解している造形要素、表現技法を第一界面(『Future Cone』のProbableの領域)として示し、教員が児童・生徒と接してほしい社会や新たな文化領域を第二界面(Plausibleの領域)として示している。第二接面上には、児童・生徒がそれぞれ設定する表現主題や、社会の中の課題を「価値」として示している。」 「まだ自己が第二界面に辿り着く手立てや授業が無い状況である。学びのドーナツでのI(私)の領域である。」
STEP 2	「児童・生徒の力で、第二接面上の価値に到達させるために第一と第二界面の間にある学級(中間集団)に『授業』が設定された図である。授業は、どのように進んで価値に辿り着いてもよいように『面』としてのイメージである。この過程では、児童・生徒のこれまでの経験の連続性や共感性による育まれ方によって、第二界面のエリアが異なる。経験の連続が少なく、共感性を伴った多様な他者との出会いが少くない児童・生徒であれば、想定される第二界面が小さくなる。」
STEP 3	「授業によって、自己が第二界面まで広がることで、生徒自身が社会の中で新たな第二界面と価値を設定することを繰り返し、新たな文化領域を広げていくことを図示している。」

③第3次研究「ANCSモデルワークショップ」

そこで、2019年から始めた第3次研究では、ANCSモデルに基づく題材開発やカリキュラム構築を進めつつ、対象を児童生徒に限定せず、教員を含む成人を対象とした「大人の造形あそび」というワークショップやアートプロジェクトを実施した(以下、ANCSモデルWSと表記)。ANCSモデルWSの参加対象を、成人に設定し、造形的な技術習得を主眼にせず、自身の未来をイメージし、表現活動を行う過程での創造性に関わる新たな視座の獲得を重視している点にある。なお、第2次研究も第3次研究と共に進めている。それは、ANCSモデルWSに参加した教員が、各学校園での授業実践に還元し、第2次研究がより深まることを期待したからである。2023年度までに実施したANCSモデルWSの実施概要は表2の通りである。

2024年度はこれまで実施したANCSモデルWSの参加者である教員を調査対象とした成果をまとめているため、現段階での明確な成果を明らかにするまでには至っていない。しかし、ワークショップやアートプロジェクトのように他者が用意した特別な

機会が、佐伯の「教える」という意味を持った研修ではなく、日常での「学びがい」につながっているとは必ずしも言えないことが、第3次研究における課題点であった。つまり、本研究チームが用意した学びの場であるANCSモデルWSへ参加した教員にとっては「協働社会の一員」としては異なる文脈の場であったと言えよう。そのため、ANCSモデルWSでの経験が社会の一員としての自覚を持ちつつ学ぶ姿勢を培うことと結びついていないことが課題であった。

表2 ANCSモデルWSの実施概要一覧

WS名	日時	会場	参加者数
絵の具ぬたくり大会	2019年 7月28日	神戸市立吉田中学校	65
徹底分解…で、 どうする？	2020年 2月22日	芦屋市立精道小学校	30
遊びをつつむ	2022年 5月29日	①北海道教育大学 附属義務教育学校 ②滋賀大学教育学部 附属小学校 ③松原市立松原南小学校 ④かがやき認定こども園	89
コウテイから 生まれる	2022年 11月19日	大阪市立天王寺中学校	34
つまらないを つくる	2023年 4月23日	①大阪市立天王寺中学校 ②神戸市立吉田中学校 ③岡山大学教育学部 附属中学校 ④岡山県立玉島高等学校	68
びわ湖に遊ぶ	2023年 5月27日	高島B & G海洋センター	32
DADAを こねる	2023年 7月16日	神戸市立吉田中学校	21

(2) 本論文に至るまでの研究における課題

本研究チームによる2009年から始まった第1次研究から2023年までの第3次研究の経緯を踏まえた課題は二つある。

一つ目の課題は、題材やカリキュラム開発をする際に、題材やカリキュラム開発を行う教員自身が学ぶことへの検討が不十分であった点である。子どもだけでなく、教員にとっても、図3のSTEP1のように価値の外側として「社会・新たな文化領域」が存在するならば、年齢に関わらずSTEP2～3への展開も想定できよう。そのため、市井プロジェクトの対象を教員にした。

二つ目の課題は、題材検討を行う研究会や教員を対象としたWSが、日常からの発見を連鎖させる機会にはなっていなかった点である。図3のSTEP1の「社会の中の課題」を、教員の学びとして捉え直すと、授業改善やカリキュラム構築を考える際の視

点を「授業」という枠から広げて「社会」における「授業」の意義を考え直す必要があると言えよう。例えば、児童が自分の好きな色を絵の具の混色によって作り出す題材を実施するのであれば、教員自身が感じた「社会の中での課題」を踏まえて混色の授業展開を検討する必要があるということである。

以上のことから、第1次研究から第3次研究の以上の課題を達成するために、本論文に至った。

4 「市井no姿勢ni学ぶプロジェクト」について

市井プロジェクトでは、第2章の図1に示した通り四つの段階がある。また、市井プロジェクトは本論での実施だけでなく、本研究メンバー一人ひとりが随時行っていくため、本論で取り上げる調査内容は第1回目に該当する。市井プロジェクトの詳細は以下の通りである。

(1) 目的

市井プロジェクトの目的は、教員自身も日常生活での＜市井＞にある文化や学びを教育活動に活かすことである。本論において＜市井＞とは、図3のSTEP1のように価値の外側として「社会・新たな文化領域」に関わる身近な「他者」を示している。

(2) インタビュー概要

第1回目市井プロジェクトのインタビュー対象となる＜市井＞は、筆者の勤務校付近にある「器楽堂老舗」のK氏である。K氏を＜市井＞に設定した理由は、筆者が指導する生徒の探究学習で協力していただいたことがきっかけである。そして、今後「共に学ぶ」ための授業改善への協力許諾をいただいた。

インタビューは、特定の質問を設定せず、「現在の生活からどのようなことを学んでこられたのか」というテーマに基づいて進めた。なお、インタビューは、ボイスレコーダーで音声の記録を取ることにへの許諾、研究協力への承認を得た上で実施した。

(3) 第1回の実施概要

「器楽堂老舗」の店長であるK氏との第1回市井プロジェクトの実施概要は以下の通りである。なお、図4はインタビューの様子を撮影したものである。

日 時：2024年10月14日（月）

16：30～17：30

場 所：器楽堂老舗

対象者：器楽堂老舗 K氏¹⁵

質問者：妹尾 佑介



図4 器楽堂老舗のK氏とのインタビューをしている様子
(右：器楽堂のK氏 左：質問者)

5 市井プロジェクトのインタビュー結果と考察

以下では、図3で示したANCSモデルの各学習過程に該当すると筆者らが判断したインタビュー内容を取り上げ、教員としての学びがどのように行われているのかという過程を検討する。なお、インタビュー内容の検討は本研究チームで行った(図5)



図5 K氏とのインタビュー内容を検討している様子

(1) STEP 1の場面「方法論と実践の関係」

ANCSモデルの学習過程STEP 1では「社会の中の課題を『価値』として示している」段階である。そこで、本インタビューにおいて表3の場面を抜粋する。

本場面では、高校教員である質問者が探究活動で「器楽堂老舗」へ訪問した際の感想を渡す場面から始まる。最初に、STEP 1における「社会の中での課題」に関係する話として、K氏が社会生活での経験で得たお客様への対応について一定の方法はあるが、「距離感みたいなものは、実践しかない」と話した場面が挙げられる【表3-①】。つまり、社会生活の中で実践を繰り返していくことが、社会としての「価値」として「おもてなしの方法」が形成さ

れていると話しているのである。そして、より具体的に方法論を知ることと、方法を試すことの重要性を「社会という大海原に行った時に、泳ぐ方法は分かるけれど、波が想定外、油が浮いていたり、波が高かったりすると、方法論だけでは太刀打ちできない」と、K氏は話した【表3-②】。

そのため、本場面では、おもてなしをする「方法」を他者に向けて実施するには、他者と関わる「経験」が必要とされていることが分かる。換言すれば、それは他者との関わりが「社会の中の課題」を解決のために必要な「価値」に該当すると言えよう。しかし、現段階では、「どのように他者と関わっていくのか」についての話はされていないため、質問者で

表3 STEP 1の場面：「方法論と実践の関係」

話者	発話内容
筆：	先日は生徒たちがお世話になりました。これは、先日お邪魔したときの生徒たちの感想です。 (生徒のレポートを手渡す)
K氏：	ああ、こんなことに気付いてくれてたんですね。うれしいです。質問されているうちに、この話題になったんです。 私こんなこと喋るつもり全然なかったですからね。だから、引き出したのは生徒さんです。こんな本質的なことを引き出してもらって。最初は質問を受けて私が答えてっていうのが予定だったのですが、多分その場で質問を変えられたんだと思います。
筆：	それは生徒が器楽堂さんのお話に驚いたんだと思いますよ。私自身、最初に来させていただいた時に驚いたので。
K氏：	そうなんですか。
筆：	はい。おもてなしは方法論じゃないな、というのをすごく感じました。
K氏：	「ここは右よ」とか「ここは違うわよ」とかいうのが方法論なんだと思います。 <u>①実際にお客様が来られた時に、方法が基本にはありますけれど、距離感みたいなものは、実践しかないっていう。</u>
筆：	我々も、今まさに方法論なしでお茶を頂いている状況ですし。でも当然そういう人もいらっしゃるわけですね。
K氏：	もし方法論だけでいけるなら、相手の方も簡単ですね。ただ、方法論が全く通用しないのが社会っていう。 <u>②社会という大海原に行った時に、泳ぐ方法は分かるけれど、波が想定外、油が浮いていたり、波が高かったりすると、方法論だけでは太刀打ちできない。</u> でも、方法を持っているから、海水を飲みながら、溺れながら、「あ、こうやったらいいんだな」と知っていく。それが実践なのかもしれない。

ある筆者にとって「まだ自己が第二接面に辿り着く手立て」がない状況である。

（２）STEP2の場面「共感に基づく理解」

ANCSモデルの学習過程STEP 2では「第一と第二接面の間にある学級（中間集団）に『授業』が設定された」段階であり、教員を対象とした本論に置き換えれば、『授業』に該当する存在が市井プロジェクトでのインタビューである。そして、STEP 2は「これまでの経験の連続性や共感性による育まれ方によって、第二接面のエリアが異なる」とされ、質問者自身の経験に基づく対話の場面として、表4の場面を抜粋する。

本場面では、K氏との対話で方法である「型」をどのように実践に繋げていくのかという話をする。具体的には、K氏は「型ができない限りは、破ったり自分が大きくなれない」、だからこそ型を「きっちり学ぶ場は大切だと思います」と話す【表4－③】。K氏の発言に対して、筆者は「ちょっと変えようと思えるのは、習ったのが身に付いているから」と話し【表4－④】、さらに高校教員である自分自身の経験と照らし合わせて「教員同士の共有も難しい」と返答した【表4－⑤】。

つまり、本場面ではSTEP 2においてK氏の発話内容に、質問者である筆者の「経験」に基づいた共感を示している場面であると言えよう。人をおもてなしする「型」という「価値」に対して、K氏と筆者の各職種の視点から「共感的な出会い」がなされている。

（３）STEP3の場面「共に学ぶK氏」

ANCSモデルの学習過程STEP 3は「自己が第二接面まで広がること」を通して、「社会の中で新たな第二接面と価値を設定する」段階である。そこで、本インタビューにおいて表5の場面を抜粋する。

本場面では、K氏との対話を通して、質問者である筆者が新しい「価値」について話している姿が見られた。特に質問者である筆者が「もっと気楽に地域に出よう」【表5－⑥】や、「それでもそれを上回る良さがあるよね、っていう感覚が大切」【表5－⑦】という発言から、筆者自身がK氏との対話で新たに見出した価値として、「地域との関わり方」の捉え方の変容がうかがえる発言である。表3においては、これまでの経験、つまり過去のことを話しているのに対し【表5－⑥・⑦】では、これからの教育活動に必要なことを話している。このことから、発話内容における視点が過去から未来に向けて変容していることが分かる。

そして、K氏自身も「これからもっと引き算が求

表4 STEP 2の事例：「共感に基づく理解」

話者	発話内容
K氏：	よく言うのが、お茶の世界だと、茶がないとかくと「無茶」になるんですね。苦い茶になると「無茶苦茶」、茶が減すると「減茶苦茶」になるという。 ③だから、型ができない限りは、破ったり自分が大きくなれないんだなというのを、私自身が経験してきたので。やはり、そこをきっちり学ぶ場は大切だと思います。学校で型を習うことをマイナスのように言われる方がいますが、そこで習っているから考えられることがたくさんあると思うんです。先生から学ぶことがいかに重要かっていう。先生のご尽力っていうのは、後になって必ず何かの糧になるんだなと思います。
筆：	一方で、大海原に出て、ちょっと塩水を飲むという経験も時に重要なわけですよ。それはでも、型がなければただ溺れるだけになってしまうという。 ④習ったやり方だけではダメだな、ちょっと変えようと思えるのは、習ったのが身に付いているからである、ということですよ。だけど、環境を通してそれを変えていく柔軟さや、度胸と言いますか、そういうのも必要ということになりますよね。学生さんは凄くいい経験をなさったと思います。
K氏：	学生たちは筋肉がメキメキついていったと思います。
筆：	そうですね。我々としては、習得したものを大海原に向けて、少し踏み出してみるみたいなどころまでを、学習としてやっていきたいなと思っています。そこで悩んでいるんですよ。きっちり型を教えたいと思うと、でも、型通りすればなんでもいくとは思ってほしくないという思いと。両方をどう伝えるのかっていう。やり方、型を知らないで、「型通りじゃなくていいよ」って本当の意味で思えない。「型通りじゃなくていいんだ、じゃあ型なんかなくていいんだ」っていう考えではないじゃないですか。⑤その微妙なニュアンスがなかなか。教員同士の共有も難しいんです。
K氏：	微妙な部分ですもんね。柔らかい部分だから、そこが。言葉にしづらいというか。実はお茶の世界でも、お茶を習っている方々もそうですが、お茶をずっと教えている方とか、長年やっている方も陥るんです。お稽古のためのお稽古で終わる方がとても多いんです。だから「叱る」になるんですね。お客さんに対して、ちょっとイライラするとか、冷たい視線を投げちゃうんです。私たちが想定していること以外をしちゃうと、「あの人が悪い」と。だから、実践がものすごく大切なんです。

められていくんだろうなというのが、これから私が成長していかなければいけないところ」と話していた【表5－⑧】。この発話内容からも、市井プロジェ

クトで学ぶ立場である質問者だけでなく、K氏も新たに自分自身が成長すべきことを話している点からも、佐伯が述べた様に「共に学ぶ他者」として質問者と関わっている可能性は高い。

以上のことを踏まえて、本場面では学ぶ機会を提供する立場であったK氏も含めて、質問者である筆者と共に学ぶ姿が見られた場面であったと言えよう。

6 第1回市井プロジェクトの成果と課題

(1) 成果

K氏とのインタビュー内容を踏まえ、市井プロジェクトの成果は、二つあると考える。

一つ目の成果は、ANCSモデルにおける各学習過程と、市井プロジェクトの目的には親和性があることを確認できた点である。それは、ANCSモデルの各学習過程であるSTEP 1からSTEP 3で想定した児童生徒の姿(表1)と、同じ姿が第1回市井プロジェクトのインタビューにおいて質問者やK氏にも確認できたからである。無論、ANCSモデルと同じ姿が確認できた要因として、本論の目的を理解している質問者である筆者がインタビューしたことが影響している可能性もある。しかし、井庭が述べた様に、教員自身も「発見の生成・連鎖」を目指すのであれば、共に学ぶ他者であるK氏との対話から意図的に「発見」する姿勢は必要不可欠と言えよう。

二つ目の成果は、インタビューを受ける立場であったK氏自身も、「学び」を提供するだけにとどまらず「共に学ぶ」姿勢へと変容する姿を確認できた点である。つまり、市井プロジェクトにより、学ぶ側である教員以外の「他者」に学ぶ姿勢が伝播する可能性を示唆する場面があった。具体的には、【表5-⑧】である。この場面では、K氏自身もこれから成長すべきことを明言する姿から、市井プロジェクトによって得られた学びがあったと言えよう。

(2) 課題

本論において、第2章で先述した市井プロジェクトの流れにおいて③や④の段階までは至っていない。市井プロジェクトの①と②の段階までを踏まえた課題は、K氏と直接対話した質問者と、図5の様にインタビュー内容を間接的に聞いた人とは、インタビュー内容への理解度が異なる点である。その要因としては、質問者と間接的にインタビュー内容を知りえた人との経験や知識や、K氏との関係性の違いが挙げられる。そのため、「共に学ぶ他者」と学習者の状況や関係性を精査する必要性がある言えよう。それにより、デューイが述べるように他者が

表5 STEP 3に該当する場面：「共に学ぶK氏」

話者	発話内容
筆：	我々も自分より柔軟な人にお会いすることが大切なんです。結局僕たち教師のストレッチができないんですよ。今日はストレッチしにきたんだなと思って。少し理解できた気がしました。 <u>⑥もっと気楽に地域に出ようと思いましたね。いらない気を遣ってガチガチになっていたように思います。</u>
K氏：	どこからが「いらない気」なのかわからないですね。
筆：	だから自然に気を遣えるっていうのが身につけばいいんですけど。自分が出来ない気の遣い方をしようとして、疲れちゃう。若手の先生とかそうだと思います。
K氏：	本当は怖くないのに、ちょっとのことで「あー違った」って思って。
筆：	私もそうですけど。気を遣うことも確かにあるけど、 <u>⑦それでもそれを上回る良さがあるよね、っていう感覚が大切かな。結局面白くないと。だけど、その面白さが毎回違うから面白いんですよ。何があるかわからないけど、面白いことにはなるだろうみたいな。</u>
K氏：	「その突破口って実は、張本人の生徒達から教えてもらえるっていう感じですよ。昨日の件も、学生が突破してくれたから。今回は、私がしんどくなってしまってこれ以上準備ができなくなってしまったんです。どうしようと思っていた時に、学生さんの方が一歩踏み込んできてくれた。昔は私で準備できてたんですよ、何が起きても大丈夫なくらい。でも最近はそれができなくなっちゃって。
筆：	たくさん準備してた経験があるから、今回の引き算が成立したんですね。
K氏：	私たちも成長させていただいていますね。体力だけがないからイベント中に私、寝ちゃいそうになったんですよ。それがかえて学生さん達の成長につながるという。 <u>⑧これからもっと引き算が求められていくんだろうなというのが、これから私が成長していかなければいけないところですね。一生勉強です。お茶はやっただけのことが返ってくるから。本当に大変なことですね。</u>
筆：	はい。共感もしますし、自分自身こうありたいと思うお話ですね。
K氏：	教える方の我々が迷うというか、揺れちゃうというか。そういうところがありますよね。先生は常に迷われていらっしゃるって、自信を持つことが出来ない部分がありますよね。

「協働社会の一員」や、「毎日顔を合わせて協働する」立場である必要性の根拠となる知見として期待できる。

7 今後の展望

本論では、先述した通り、市井プロジェクトの流れにおいて③や④の段階までは至っていない。今後、K氏とのインタビューを踏まえて改善した授業の検討をK氏と共に行う。

そして、②の対話を受け、質問者である妹尾は次の通りコメントした。

「型についての話は、美術科の授業にも通底すると感じた。美術の授業においても、表面的な模倣ではなく、その意味を理解して型を学ぶことが大切だろう。そして、そうした型は、個人の何気ない仕草などにも見られる。いわば型とは、その人らしさの本質に関わるものである。そのため、型を理解する授業は、他者の存在によって自分の型に気づく時

間になるかもしれない。そのような授業をやってみたいと、今回の対話を通して思った。」

第1回の③④と、第2回市井プロジェクトでは本論で得た課題を踏まえて、教員の学びや市井の学びの要素を検討していきたい。それにより、2025年度以降、市井プロジェクトの成果を第2次研究でのANCSモデルの題材やカリキュラムや、第3次研究でのANCSモデルWSへの援用を進めていく予定である。

〔謝辞〕

本稿は、JSPS 科研費 JP24K05939 の助成を受けて、令和6年度から令和8年度までの3年間実施する研究の一環として執筆した。

註

- ¹ 文部科学省HP，教育基本法第九条（平成18年法律第120号），2024年11月1日閲覧，https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html
- ² 文部科学省HP，教員研修，2024年11月1日閲覧，https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenshu/index.htm
- ³ 佐伯胖『「学ぶ」ということの意味（シリーズ子どもと教育 教育をふかめる）』，岩波書店，1995，p.45.
- ⁴ アンリ・ワロン（Henri Wallon），浜田寿美男（訳）「自我の水準とその変動」，『身体・自我・社会—子どものうけとる世界と子どもの働きかける世界』，ミネルヴァ書房，1983，p.27.
- ⁵ 井庭崇『クリエイティブ・ラーニング：創造社会の学びと教育（リアリティ・プラス）』，新読書社，2019，p.158.
- ⁶ 同上，p.142.
- ⁷ レフ・セミョーノヴィチ・ヴィゴツキー（Lev Simkhovich Vygotskiy）（著），柴田義松・宮坂【ゆう】子（訳）『ヴィゴツキー教育心理学講義』，新読書社，1983，p.285.

- ⁸ John Dewey, “Creative democracy: The task before us”, American Education Press, Incorporated, 1940, p.15.
- ⁹ 清田哲男「ユニバーサルデザインによる美術教育カリキュラムモデルの構築のための研究—試行用カリキュラムの構成を通して—」，『美術教育学研究』大学美術教育学会誌48号，2016，pp.145-152.
- ¹⁰ 清田哲男「創造性が社会と出会う美術教育のためのカリキュラムの構築と学習効果の研究」『美術教育学研究』大学美術教育学会誌50号，2018，pp.153-160.
- ¹¹ 清田，前掲9），pp.145-152.
- ¹² 佐伯胖，1995，『子どもと教育「学ぶ」ということの意味』，岩波書店，p.66-74.
- ¹³ 同上，p.66.
- ¹⁴ 清田哲男「創造性が社会と出会う美術教育のためのカリキュラムデザインの研究—「未来の可能性」と人間中心デザインの視点からの一考察—」『美術教育学研究』大学美術教育学会誌52号，2020，pp.153-160.
- ¹⁵ K氏は器楽堂老舗の経営だけでなく，近隣の高等学校や大学で茶道の講師をされている。